

春風と共に

よりも、双輪軽く春風と共に漂々と旅したい気持ちの方が遙かに強くなつてくるのである。この気持ちが頭をもたげるときは、毎年きまつたように三月のスキー行の帰りである。車窓から見る潤いを帯びた黒土の野道、その道の左右に拡がるさみどりの草

東京から名古屋への五年間の双輪の跡……

旅・七つの回想

山本 秀男

私の双輪の跡は、五年の歳月を要して東京と名古屋の間を結んだ。すなわち東京―川越―本庄―前橋―渋川―薬師温泉―長野原―浅間高原―中軽井沢―追分―塩名田―望月―和田峠―下諏訪―塩尻―鳥居峠―木曾福島―中津川―白狐温泉―多治見―瀬戸―名古屋がそれである。この道は結ぶべく意図して結ばれたものではない、いわば思いつきの集積である。従つて走つた順序も相前後していれば、しばしば枝葉のように双輪の跡はそれている。だが、ともかくも東京―名古屋が一本に結ばれたわけである。感慨も一しおというところである。結ばれてみれば一本道ではあるが、想出は回想とともにあつて必ずしも一様ではない。五年の歳月は感受性をも変化させたりし、自転車をも変化させている。あるときは風物に接して心悲しみ、あるときは少年のように楽しみ、あるときは失敗さえも演じている。その数えきれないほどの想出をたどるのも、一つにかかつて東京から名古屋まで結ばれたことが感無量であるからにはほかならない。

1. 荒川の橋と櫛挽野

荒川が秩父盆地から抜け出して、関東平野に入ろうという所に寄居という町がある。東京から川越街道を北西に走つて七〇軒ほどの距離だ。寄居の町から東へ四軒ほどであろうか、荒川に架けられた目立たない橋がある。橋には欄干がないので橋の名を知ろうにも手がかりがなかった。そんなことが私をひきつけたのかも知れない。走ることをやめて、人の通るのを待った。一人の気安さで誰にも気がねはいらなかった。

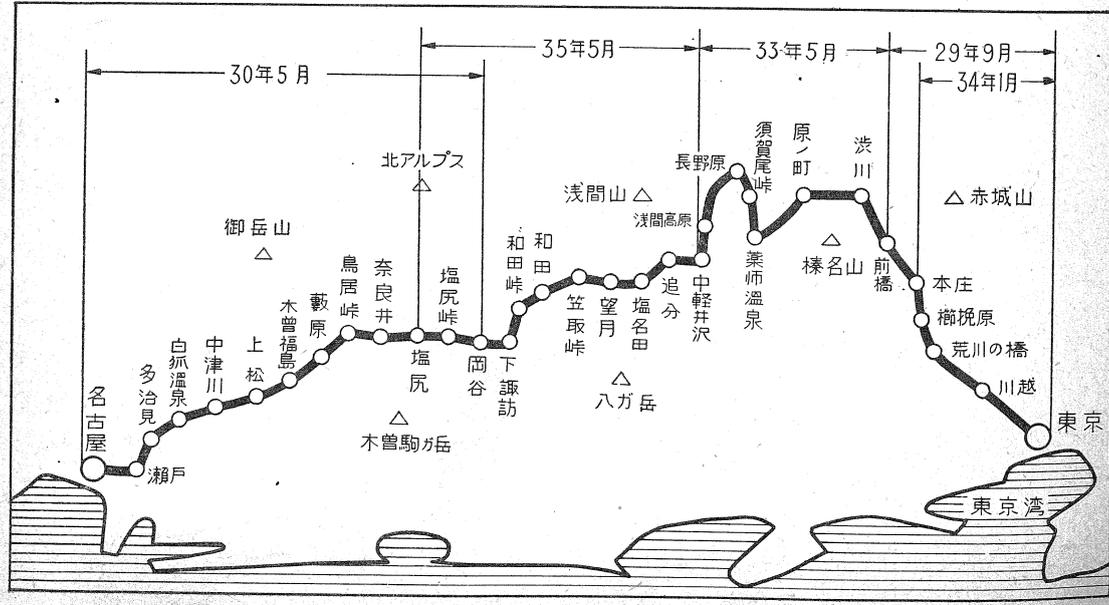
今年の一月のことである。私がこの橋の上立つたのは、もう三時を過ぎていた。一月のことだから、三時といえませんがに冷えも目立つ夕方であつた。その日は武蔵野の雪景色をみようと思ひ立つて、軽装備のまま川越街道をたどり、坂戸町から武蔵嵐山、男衾を経てこの橋に出たわけで、初めから日が暮れたら列車を利用して帰るつもりでいた。すでに本庄から帰るつもりになつていたので、あわてる必要は少しもなかった。

年老いた夫婦がゆつくりと橋を渡つてきた。私は年寄を呼びとめて橋の名をたずねた。

「さあ、わしらはただ荒川の橋というてが」

と翁さんが答えただけだつた。婆さんは黙つて顎で相槌を打つた。そして、またもとのとりのゆつくりした歩調でいつてしまつた。

雪が降ると武蔵野の冬は見違えるほど明るくなる。一たび止めば、あわただしく溶けていくからである



集合 二〇日午後五時、正丸峠ガーデンハウス前
 行事 会員交歓、キャンプファイアー、秩父セメント見学
 コース 正丸峠―秩父―長瀬―寄居―松山―川越
 申込 各クラブ又は協会事務局（浦和市領家一六三 浦和 四六四一）

が、その明るさは底抜けといつていいほどだ。楡の幹のまわりから雪がとけるのも面白く、麦が緑をのぞかせたかと思うと、みるみるうちに畝が現われて大地に縞模様を作る。それに空が澄んで関東平野を限る山々が一べんに白くまばゆい姿を現わすのも景観だ。そんな風景を堪能したあげく、たので、荒川の浅い青い流れは、濁きをいやす水に似て少しも冷たさを思わせなかつた。私は北側の土堤の斜面に北風をさけて、一日の最後の日だまりの中に腰を下した。そして橋を更めて眺めてみた。

橋は流れの上だけがコンクリートで、乾いた川原の上は木作りである。欄干がないので橋の上はサバサバしている。けれども橋桁が大袈裟だ。私はやつと思ひ出した。この道に入る時、「冠水橋、自動車通行止」と記した交通標識があつたようだ。この橋は冠水橋なのだ。

荒川は荒れ川と呼ばれた。そのように大洪水を起しては荒れたのだ。その洪水のとき上から来る流木をそらすのが、この冠水橋の役目である。人が渡るのは附録のようなものだ。私は本で読んだ記憶がよみがえつたことに楽しくなつた。

その日は荒川は静かであつた。流れから頭を出している石の上に挽セキレイが一羽、長い尾で石を叩いていた。端麗な姿の鳥をみると一人旅の味がしみじみと味わえるのであつた。

冠水橋から最短距離をとつて本庄へ抜けるつもりであつた。巾一米ほどの小道でみつけた古い石の導標は「当字を経て本庄方面」と刻まれていた。導標は二十二夜待の石塔と並んで枯草の中に立つていた。この古い導標に従つて踏みこんだのが榊原である。

実際、踏みこんだという言葉がびつたりしていた。寄居をまわれぼよかつたと後悔したが、戻るとも何か惜しまれた。およそ四軒平

方はあると思われる平坦な開拓地である。まだ代替りをしたことがないだろうと思われる家が、大地にへばりついていて、そんな家も遠くに見えるだけで、道は無愛想な表情をして真直に伸びていて、大きな石が粗つぽく敷きつめられていた。そして石と石との間からは雑草がのびていて、そのまま枯れていた。自転車は歯が立たなくなつた。仕方なしに引いて歩いた。ところどころ十字に交差する道はあつても、どれも同じような道だつた。左手には秩父の山なみが逆光にたつた。前方よりやや右手に赤城がのじかる雲をささえて横たわつていて。およそ北西に向つて歩いていると考えられた。けれども、方角はわかつても、二、三〇分の間はあがきようがないことは知れていた。ただ黙々と車を引いて歩くだけだつた。

歩きながら私は回想していた。私の生きてきた一時機に、こんなやり切れなさの何年かがあつたことを。戦争の結末を皮膚で感じていた頃だ。休日以外に新宿を歩くものなら憲兵が眼を光らしていた時代があつた。あがいても仕方がないと思つて歩いていた。そんな歩みを、戦後どれほど悔んだか知れなかつたが、その揚句に兵役であつた。ちようど、こんな日の暮に、駒沢練兵場で母と面会したことがあつた。その時は肌に靖国神社の門鑑が冷たくへばりついていて。死んでも誰であるかが、すぐわかるようにするための、真鍮の小判の形をした薄い板だ。

本郷村へ出たとき、すぐにはスピードを出せなかつた。榊原とは、そんな原であつた。

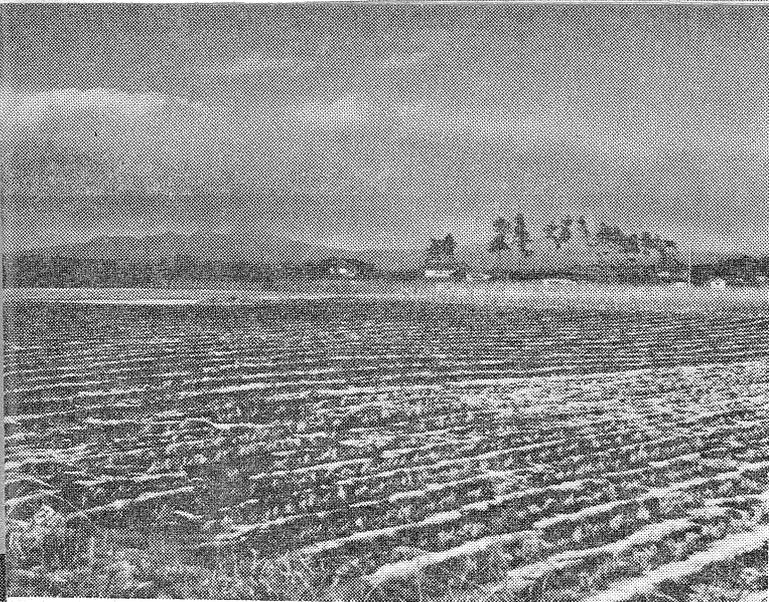
2・山の湯：薬師温泉

薬師温泉の想出は、不愛想な子守娘の想出でもあるが、不思議と腹がたたないから面白い。

去年の五月の連休である。第一目の宿を薬師温泉にきめた旅だつた。高崎で車を受取り、前橋へきたらもう昼近かつたという、のんびりした走り方だつたが、今井氏と平岩嬢という気心の知れた三人連れは、追風に追われて、どうやらランプを使わずに自動車道のドン詰りまで到着した。薬師温泉は浅間隠山の麓にあるが、道は一方にだけ開けている辺鄙なところだ。私たちは高崎から前橋、渋川に廻り、吾嬬川の南岸、つまり日影道をたどつて、原ノ町から温川ぞいに入つてきたのである。近道をするなら高崎から直接榛名の裏を廻つて温川ぞいに出ることもできるが、わざわざ遠廻りしたのも、高崎の群馬バスの案内所に頼んで薬師温泉の予約をしておいたからである。

自動車道のドン詰りを左に折れて温川の川音を真近に聞くころは、すっかり日が暮れていた。鳩の湯の佻しい灯影が夜を招きよせているように見えた。鳩の湯の前を通りすぎると、まもなく薬師の温泉宿だ。どちらとも一軒家で、温川の流れたかたえにあつた。

玄関に立つていたのは子守娘であつた。



案内を乞うたが返事をしない。子守娘は奥から誰か出てくるものと思ひこんでいるらしい。ただ、珍しい形をした自転車とニツ

薬師温泉
た。私は湯に浸りながら雰囲気を感じていた。今井

た。
薬師温泉に山の一夜を送つた私たちは、吾嬬溪谷の羽根尾から浅間高原へ登つた。

案内を乞うたが返事をしない。子守娘は奥から誰か出てくるものと思いこんでいるらしい。ただ、珍しい形をした自転車とニツカースにハンチング姿の異な風体の私たちを見比べては眼を丸くしているだけであつた。

「誰もいないのかい？」

と娘に聞いた。

「いる」

といつて奥の方へ首を廻したが、呼ぼうとするでもない。大変なところへきたと思わざるを得なくなつた。

「今晚は！」

と大声を出した。女が出てきた。

「満員ですが——」

これには流石に驚いた。高崎の群馬バス案内所で予約をしておいたのだが聞かなかつたかと尋ねると「聞いたような気もする」といつて、はなはだ頼りない。部屋があるから来たのだと駄目を押すより仕方なかつた。一軒宿ではそれより手がない。

「じゃ、とにかく上つて下さい。成田から来るというお客さんがまだきてないんで空いている部屋がありますから」

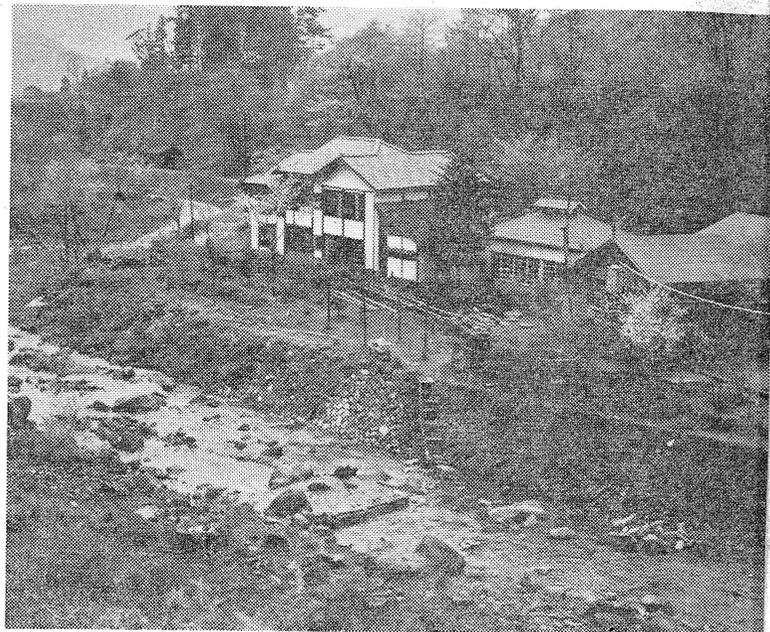
と答えた。

「成田のお客が来たらどうする？」

「上の部落の誰かの家に交渉して泊まれるようにしてあげます。もうすぐ最後のバスが来るから、それでこなければ、そのままです」

「大変なことになつたが、それもやむを得ない。せめて食事を急いでくれと頼んで、

ばよかつたと後悔したが、戻るのが何か惜しまれた。およそ四軒平した薄い板だ。



あてがわれた部屋に落付いた。

山小舎を少し立派にしたような作りだが部屋は十二畳くらいだつたらう。襖が板張りなので妙に暗い。小さな食卓が、こと更に小さく見える部屋だ。

時計を見たら終バスはもう二〇分前に着いている。間もなく、成田の客が来なかつたことがわかつてホットした。

湯は、ぬるくてにごつているが、木造りの浴槽が、川の音と調和して、人の心をし

ずめてくれる。湯治の客だらう、聞きおぼえのある上州訛でボソボソと話合つてい

ちらも一軒家で、温川の流れたかたえにあつた。

玄関に立つていたのは子守娘であつた。

薬師温泉

た。私は湯に浸りながら雰囲気を堪能していた。今井氏も同じような顔をしていた。部屋がきまつたら、一べんに落付いてしまつたようだ。大そう温まる湯であつた。

献立はイワナのフライとワラビと、そのほかにも何かがあつたようだ。折角のイワナもフライなので、いささか失望したが、それでもマグロの刺身が出ないのでホットした。

二本ばかりのビールが、たちまちに眠気をさそつた。

あくる朝は須賀尾峠を越えて長野原に出たが人しか通れないこの山深い道を越えるには、スターメーアーチャーのFWをつけたライトツーリスト型の自転車が大きい役にたつた。オールランダーのバーは急勾配の下りを容易にしてくれたからである。

3・浅間高原

満目蕭条。そんな古風な表現がびつたりする。五月初旬の浅間はそんな風景であつた。

薬師温泉に山の一夜を送つた私たちは、吾嬭溪谷の羽根尾から浅間高原へ登つた。軽井沢へ出て汽車で帰るつもりであるからこの日もゆつくりした旅の気分を味わえた。だが、それにしても、なんと浅間高原は荒涼としていたことだらう。

北方に白根山、その左が吾妻山、そして西方眼の前は浅間山が煙をあげている。東をみれば頂上の尖つた浅間隠山があり、稜線をつなげて鼻曲山の特異な山容に続く。この広い空をささぎるのは、そうした山だけで、南の方は、高原がそのまま地平線を画いている。山は黒ずみ、草はまだ枯れたままである。落葉松の芽吹さえ、須賀尾峠にくらべてはるかに若い。道は南に登るに従つて悪くなる。火山灰の薄ぐろい道だ。轍の跡は浅い。わずかな勾配ではあるが明らかに登りである。そのうえに火山灰の道は足を奪おうとする。難渋というほどではないにしても段々と足が重くなる。

そんな風景の中で私は舞台装置家のような気分を遊んだ。それは今井氏がはるか後に走っているからである。後をふりかえつては、装置を考えていた。舞台装置といつてもこの大きな自然を動かすことも出来ないければ刻むこともできない。ただ主演俳優の性格を最もよく活かす、効果的な背景を発見しようとしていたのだ。

私の思うところでは、今井編集長ほど、荒涼たる風景の似合うサイクリストはいない。冷酷なまでに執拗な眼鏡の奥の眼と、

そして瘦身を濃紺に包んだ姿とが、不思議に満目蕭条たる風景にマツチするのだ。だから彼が主演俳優で曠野に立つシーンがあったら、私は脚本に多少忠実さを欠いてもより荒涼たる曠野を作るだろう。そんな考えを楽しみながら、群馬県と長野県の県境まで来た。最高の条件を得たと思つて、私は彼の近づくのを待つてカメラのシャッターレリーズを押した。これは昨年の六月号の口絵にのせた「火山灰地」と題する一枚の写真である。

ジエーム・ステインが肩をそびやかして足早に街中を歩いている写真がアサヒカメラにのつたことがある。私はあの写真は好きだが、この浅間でとつた今井氏の写真は同じように好きだ。そして愛着を持つてゐる。

さしもの荒涼たる浅間高原も、峰の茶屋から南表になると、急傾斜とともに趣を替えてくる。とくに千ガ滝から中軽井沢の駅まで一気に下る舗装路は、サイクリストたちにとって忘れさせるだろう。私も一気に入りに下りてしまった。ただ、このダウンヒルで落車して死んだ長森嬢のことは、さすがに想い出されて哀れに思えた。

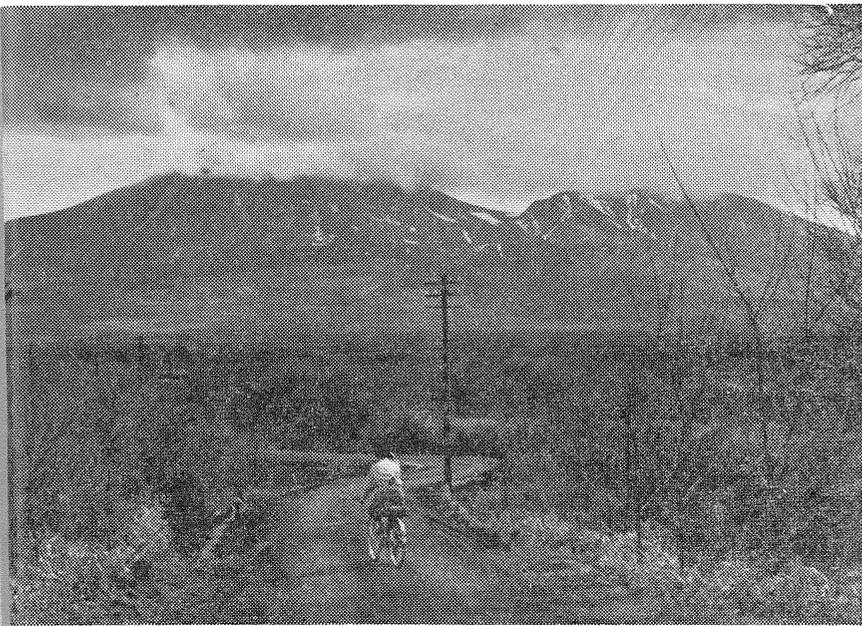
4・追分

追分の変化は私を驚かした。一昨年、追分まで自転車を受取つて千曲川をさかのぼる旅をはじめたとき、まず、追分の宿の跡にさしかかった。草叢の高みが右に北国街道左に中山道と道を分けていた。牛馬を左右

に追分けるという意味から道の分岐点を追分と名付けた昔の人の意志が、その小高い草叢に残されていた。水でさえこの道の流れてくれれば自ずから左右に流れを分けるだろうと思われぬくらい、自然な形の、いかにも追分らしい追分の宿の跡であつた。

それが、今年中軽井沢で車を受取つてバラスの道を真直にきたら、突然右側に追分の宿の跡が現われた。もはや真中で道を分けてはいなかつた。そういえば追分の部署も新道からかわされて、北側にちぢこまつているし、軽井沢町と書かれていた。杳掛が中軽井沢になつたのだから、追分が西軽井沢になる日が来ないとは私には保証できないような気がした。

碓氷峠の権現様は、ぬしのためにや守り神
こんな歌詞の追分節に追分の名が残るようになるとは、うなるかも知れない。
ペダルから足を外して立つていたら、一人の男が寄つてきて、
「右へ行つても左へ行つても同じですよ。すぐ先で一緒になるから」とわざわざ親切に教えてくれた。
多分どちらに行こうか考えていると見られたのだから、中軽井沢から来た中山道の新道は、みればそのまま北国街道の新道になつてゐる。中山道はと注意してみたら、旧分岐点より二〇米ほど先



浅間高原

で、控え目に左へそれていた。いかにも旧道らしく路面のバラスも落付きをみせながら、東京から高崎までの百軒余の舗装も、碓氷峠の舗装もみな北国街道へ直通するための舗装であることが、今更のように知れて、中山道を徳川時代の五街道の一つとして認識していた頭の古さが悲しくなつた。人間の知識の貧弱であることは知つていても、旅に出てみると今更のよう

に思い知らされるものである。
そういえば中山道は、川を渡るに難儀をした時代にこそ、大水の心配の少ない安全度の確率が高い道だつた筈である。彦根の殿様の参勤交替の行列も、例幣使の行列も、天滝川、大井川や、安倍川、富士川などの川を恐れていた時代の話であることは、とうに知つていた筈だ。所詮中山道は昔の道であるのに対し、北国街道は今も必要な幹線道路だ。追分に来てそんなことを考えさせられた。
私たちは、すでに今日には価値の薄くなつた中山道へハンドルをきつた。これから諏訪までの五〇軒は、不遇をかこつた中山道の旅であることが、予告されているようだつた。

5・塩名田のハヤ料理

旅に出て食を楽しむもうとしたり、よほどの努力をしなければならぬ。まして自転車で走つてゐると、土地のうまいものを見逃しやすからだ。
塩名田のハヤ料理は、旅に出て食を楽し

んだ一例として、将来にも想出として残るに違いないと思つた。そういう料理が、不

太平洋側からの塩の移入路であること、また岡谷、諏訪には甲州を経て入つてきたと

雄大な連峰を春霞の中に望み、蓼科山のおぼろな姿をゆつくり眺めることが出来た。

いぜい四料だろう。ともかくも吾妻川へ抜ける近道として須賀尾峠を選んだ。

さしかかった。草叢の高みが右に北国街道左に中山道と道を分けていた。牛馬を左右

んだ一例として、将来にも想出として残るに違いないと思つた。そういう料理が、不遇をかこつ中山道筋にあることも楽しかつた。

塩名田は中山道が千曲川を渡ろうとするところにある。川を狭んで西側は御馬寄といういわくあり気な名前の部落だ。いわくあり気といえば塩名田も例外でない。こんな山奥に塩と名がつくのが変である。塩商人が越後から入つてきて市をなしたか、或は塩の出る山があつたのか。大町が北陸からの塩の移入路であること、甲州の鹹沢が

追分



太平洋側からの塩の移入路であること、また岡谷、諏訪には甲州を経て入つてきたと、昔の塩のルートはいくつか読んだ記憶があるが、塩名田は残念ながら、博学の今井氏をもつても、ようとして話は進まなかつた。そんな詮索をするには不似合なほど今年もパーティーは呑気な旅をまず目的としていた。だから塩名田にきたらまずハヤを食わねばならなかつた。

塩名田は一昨年も来た。小諸から入つてきたのである。今年の中軽井沢、追分、岩村田を経て塩名田に入つた。私たちは昼飯どきを一時間半もやりすごしてしまつた。

竹酒屋というのがハヤ料理屋である。今井氏の友人が川向うの五郎兵衛新田の出身とかで、この辺にくわしく、今度の旅にはこの竹酒屋を教えてくれたわけである。竹酒屋を探すのは手間どらなかつた。町中の舗装路がカーブして千曲川の橋まで下ろすとすると、右側の急な坂を下りれば、あとはペダルを踏まずにいける距離である。千曲川を窓の下に見る料理屋で、北西には浅間山がみえていた。

鳩山一郎氏が好んで訪ねた家とかで、部屋には鳩山一郎氏の書が額にして飾つてあるのが目立つた。軽井沢にいて腹がへつたからハヤでもというわけで、ここまで車を飛ばしたのだろうか、距離にして三〇キロに充たない。ものの三〇分あれば着く勘定になる。ところが私たちは自転車だから二時間余りかかつた。そのかわり浅間山をゆつくり眺め、岩村田に入る手前では八ヶ岳の

山道はと注意してみたら、旧分岐点より二〇米ほど先

雄大な連峰を春霞の中に望み、蓼科山のおぼろな姿をゆつくり眺めることが出来た。そして林檎の花が白く咲き乱れているのを眺め、柳が青い若芽をそよがせているのみみた。更に、申分ないほど腹が減つていた。

カラ揚と天ぶらが出来る。いずれも八〇円だという。両方頼んで食事にした。カラ揚のハヤの味は格別だつた。ビールをつけられないのが惜しまれるようなうまさであつた。機会があつたら、もう一度寄りたと思つたことであつた。

6. 峠の旅情

私が双輪の跡を残した名古屋への道は、おうむね山の中を走つているといつていい。東京から渋川までと、瀬戸から名古屋までを除けば、あとはすべて山の中である。かけた時間でいえば八割以上が山の中ということになる。それほど山の中を走つても峠には峠の、別の旅情があるから面白い。思うに峠の旅情は、自転車のスピードの変化にねぞすものかも知れぬ。

須賀尾峠

須賀尾峠は人の気配のない道だ。薬師温泉を出るとすぐ峠にかかるが、私たちの訪ねた昭和三年には、新道の工事が進められていて、そこだけには多勢の人が働いていた。自転車越えられる峠かどうかとも知れなかつたが、部落の人に聞くとか越せそうだつた。峠は一、〇四八米で下の部落との標高差は三〇〇米程だ。距離もせ

の努力をしなければならぬ。まして自転車で走つていると、土地のうまいものを見逃しやすからだ。塩名田のハヤ料理は、旅に出て食を楽し

いぜい四軒だろう。ともかくも吾妻川へ抜ける近道として須賀尾峠を選んだ。人気のない峠だつたが、楽な峠だつた。自転車はオールランダーのバーをつけたライトツーリスト型だつたが、FWに一九Tのスパロケットをつけてあるので半分ほどは踏むことができた。

須賀尾峠は落葉松の美しい峠だ。そのうへ美しい緑の草が一めんに敷きつめられている。頂上では仰向けに寝ころんだ。思えば、自転車で越す峠に、これほど美しい緑の草の上で寝ころべるところが、どれほどあろうか。私の記憶には殆どない。須賀尾峠は緑の美しさに人を酔わす峠だと、私の想出は語りかけるのである。

一六〇米ほど標高が下つた向う側は、白根山のよくみえるところだつた。恐ろしく急な勾配も、オールランダーのバーで楽に下ることができた。

笠取峠

年輪がどれほどたくさんあるだろうかと思われる程の松が、街道に並木を作つていた。往時の中山道を偲ばせる立派さだ。それにしても何と道がいたんでいるのだから。バスは、この下の立科町までしかきていない。そして蓼科山の方へそれていく。中山道が不遇をかこつているとすれば、これほど見捨てられた道はないだろう。そんな道が笠取峠への東側の風景を淋しくしている。

私たちは四人連であつた。今年の五月の連休の第一日である。塩名田でたべたハヤ

料理も、ようやくエネルギーを失いつつある頃だった。とにかく道の悪いのには閉口した。自転車はクラブモデルだが、ギヤレインオだけはワイドで、ツーリングタイプダブルチェーンホールがついていた。だから歯が立たない筈はないのだが、それにしても一寸こたえる道であった。

高校生の三人連れと会った。もう五時近いというのに、今日中に下諏訪に帰るといふ。おそらく夜半も相当遅くなるだろう。三人共、実用車に大変な荷物をつけていた。彼等は私たちより先に行った。峠の頂上

笠取峠

がみえたとき、頂上で休んだ彼らは一斉に腰を上げて勢よくダウンヒルを始めた。その立上りがいかにも高校生らしくて、可愛くもあつたが、吹き出したくなるほどおかしかった。

下りは美しいカーブの道であつた。美方の原の山が、高く正面にはだかつていた。

和田峠

島崎藤村が初めて東京に出るとき、和田峠を歩いて越えたという。いまならさしずめ中央線で諏訪から甲府に向うに違いはない。そこに隔世の感がある。もし和田峠の

和田峠

昔を知っている人が生きていたら、峠の道に隔世の感をいだくだろう。昔を知らぬ私でさえ、昔はこうもあつたか、ああもあつたかと臉を閉じればその姿が想像できるような気がする。和田峠とは、そんな時代の變遷を考えさせる峠であると思う。

鰻の寝床のような細長い部落の、細くて勾配の急な道をゆつくり走るとき、夕暮ではあつたが、昔の宿場の雰囲気を感じた。軒をいつばいに道までせり出して連わっているのもそうなら、美しく丸く刈り込まれた松があるのもそうである。私たちは今年の

塩尻峠

五月はじめに、この和田の竜月という宿に泊つた。和田峠をゆつくり登るためである。

和田もそうだが、峠の途中の唐沢という部落も、刈込みの美しい松の目立つところであつた。大名行列が通つたら、どれほど似合うだろうと思われる松である。昔の和田峠の途中の休憩所だった唐沢であつてみれば、松に昔から伝わる袴持を表わしたとしても不思議はない。そんなことを考えると、松は美しく刈り込んであるゆえに哀しげであつた。もうすべては流れ去つて、

今では丸子町と諏訪

を結ぶ国鉄バスの一停留所があるにすぎないのだ。

三分の二も登つたと思われるところに、接待という停留所がある。家は道の両側に一軒づつしかない。それでも電燈がある。昔、荷を運ぶ馬に麦を喰わしたので、接待という名がついたとか。その日はよく晴れていて、黄水仙が滅法明るく眼を刺した。小高い所へ登つて石碑を読んでいた今井氏



が駆けおりにきた。そしてこんな話をしていた。

「の時間がかかりますか？」とたずねてみた。検車係氏は

諏訪湖が、そして岡谷と諏訪の町が光り、遠くに八ヶ岳の雄大な連峰がたたなわり、

勢の観光客を運んできた。峠というより展望台といった方が塩尻峠によく似合うよう



日はよく晴れていて、黄水仙が滅法明るく眼を刺した。高い所へ登って石碑を読んでいた今井氏

が駆けおりてきた。そしてこんな話をして

いた。

「昔、ここで巡査が殺されたそう。賊をひっぱってここまで来たら、賊が逃げたんだ。そして川原に入つて、石を投げた。その石の投げ合いで運つたなく巡査は死んでしまった。賊はまもなく村人に捕えられたが、その巡査の殉職を記念したのが、あの碑なんだ」

私たちは接待にくるまでに、荷をふり分けにして背中に積んだ牛とあつた。その牛をぬいたり、ぬかれたりしながら登つてきたが、時速は何と五斤に充たなかつた。そんな調子でも東餅屋についたときは、いい加減疲れを感じた。

東餅屋は昔本陣のあつたところだ。ゆいしよを記した立札があつたが、それをよむと、いまは本陣は跡を残すのみだ。峠の茶屋では、餅を売つていた。昔力餅をくわせたので餅屋の名があるが、西側には西餅屋という地名が残つて、いる。

餅は一包一〇〇円であつた。一〇個入つている。それを茶屋の囲炉裏ばたに腰かけながら番茶の接待で食べた。力餅だという感じがした。

バスが上つて来た。茶屋の前で停つたが車掌は後輪にカイモノをかつて、車を後に下るのを防いだ。エンジンが停つたら、検車係の赤い腕章をまいた職員が降りてきて、ハンマーでボテイの下をコンコンと叩いてまわつた。一〇分間の停車だそう。 「バスだ」とこの峠を越えるのにどのぐらい

の時間がかかりますか？」

とたずねてみた。検車係氏は

「二時間四〇分かります」
と答えた。私たちが長い時間を要したのも無理はない。八時に宿を出て、ここについたのが十一時半をまわつていたので。 ウィスキーのポケット壺につめた蜂蜜を買つた。一〇〇円である。

「山本君がその壺を持つたんじゃないや、蜂蜜だつていつても、誰も信用しないぜ」
と今井氏が笑つていた。

頂上は東餅屋から一軒ほどだ。自動車道は土砂が崩れるのでトンネルにしてある。最初の部分はコンクリートの円筒がむき出しになつていて、つぎ目から日ざしがこぼれて、道の上に縞目をつけている。トンネルを出ると、和田峠の頂上を示す標木があつた。はるか前方の山のむこうに、雪をい

ただいた木曾駒が五月の太陽をはねかえして、キラツと光つていた。

大部下つたところに芝生のきれいなところがあつた。水戸浪士の墓である。藤村の「夜明前」の第一部下であつたと思うが、武田耕雲斎のひきいる水戸浪士と、浪士の道をふさごうとする諏訪、松本両藩連合軍との激戦の様子が生々とかかれてあつた。馬籠本陣の青山半蔵の心をゆるがした大事件を芝生に寝ころんで想い起したが、そんな物語を思うに恰好な静かな所だつた。道は諏訪湖をめざして、下る一方だつた。

塩尻峠

諏訪湖が、そして岡谷と諏訪の町が光り、遠くに八ガ岳の雄大な連峯がたたなり、八ガ岳の裾野の果の少し右に富士が頭をのぞかせる。今年の塩尻峠はそれほど素晴らしい眺めであつた。

五年前の五月、この塩尻峠は雪であつた。私の持つた来た寒暖計は零下一度を記録した。私のアルバムにある塩尻峠の写真の一つに、興津武雄さんが交通標識に吹きつけた雪に、指でNCTCと書いたのが貼つてある。

今年の塩尻峠は、路面がよくなつた。八割方は完全舗装である。雪の中を一踏み一踏み登つたことを思い出すと、おかしいくらいに軽い登りであつた。

峠の上には松本電鉄バスの観光バスが多

勢の観光客を運んできた。峠というより展望台といつた方が塩尻峠によく似合うよう

木曾の鳥居峠は、奈良井川と木曾川にはさまれている。日本海に入る奈良井川が北上し、平行して太平洋に入る木曾川が南下している。分水嶺だ。

鳥居峠は木曾路の中にある。峠の東の奈良井部落には、

送られつ送りつ果は木曾の秋

という芭蕉の句碑が立つていた。そして峠の西の葦原には、木曾の中でも最も木曾らしい板屋根が軒をつらねていた。どちらをむいても木曾である。違ふといえは松本から来たバスは奈良井で終点になつていて、

JCA 推薦

パンクに

そなへて

一台 一ヶ

チキユーパッチ No.3

ほかの中山道の峠のようにバスが通つていないことだ。西には西のバスがある。冬は雪で交通不能になるという。いまはトンネルが出来たそうだから、或はバスも葦原へ抜けているかも知れない。

上松の宿の主が、オートバイで鳥居峠を越えて奈良井まで迎えにきた。後に「歓迎NCTC十周年記念ツアー」と書いた旗を立てていた。いかにも昭和三〇年らしい。というのは当時、サイクリングは殆ど人知られていなかったからである。

鳥居峠には鳥居峠の旅情もあつたはずである。僅かに峠の頂上、御岳山遥拝所に立つて御岳を望み、木曾駒を探したことを覚えていた。あとは車のことが想出を占領しているのである。

車は光風のロードレーサーで、昭和二八年の東京大阪間プロ・ロードレースに使つたもので、払下品である。クロモリのチューブも自慢であつたが、少し大ぶりのマース型のドロップバーも得意であつた。エンドリツクリムも珍しければ、一五時のWOタイヤも得意であつた。何よりも自慢の種は、多時のチエンと、五〇T×四七Tのレール・タイプ・ダブルチェーンホイールと、一四、一六、一八、二〇というボスタイプのマルチプル・フリーであり、テコ式のフロントデイレラーと、三光舎のレールタイプのリヤデイレラー、そしてクイックリリースハブという、豪勢な仕立である。あまり威張れないのは、後で無理につけた鉄製の、マスコットのついたマ

ツドガードだけであつた。

私が、この自転車に疑問をもつたのが、すなわち鳥居峠である。レース用であるため、八段の変速機も四四×一九というシグナルの実用車よりも、ギヤ比が高くて手に負えなかつた。とりわけ鳥居峠の登りではそれがこたえた。木曾路は木曾川を下つてはいるが、沢に出るたびに道は下り、沢を越えるところを登るといふ具合で、およそ平なところがない。ゆうに三日間というのは、高いギヤ比に悩まされたことであつた。鳥居峠の登りなどは、クランクの回転をとめないようにするだけで精一杯であつたといつても過言でない。

当時、サイクルからNCTC編のサイクリング・ハンドブック・ツアードの初版が出てまもないころだと思ふが、有効なベダリングの一項を思い出して、アンクリングでクランクをとめないように努力したことであつた。今ならおそらく、そんな無理をしまい、やはり私は若かつたと思ふ。そんな鳥居峠であつただけに、山田鉦雄さんのFWが魅力だつたし、横尾双輪館の横尾明さんがBSAのハブギヤだが、チェーンホイールを四四に落してきたことに感心したりした。

驚いたのは、興津武雄さんのワイドレイシオのダブル・チェーンホイールであつた。まるで平地を走るような恰好をして、すると峠を登つてきた。650Bという太いタイヤの魅力も、この峠では、感じたことである。とにかく私は木曾路で自転車の

勉強を余儀なくされたわけである。私はその後この車はツーリングには使わないようになったし、私の性癖りのないまでの自転車作りの道楽の発端も、いまにして思えば、この鳥居峠をはじめとする木曾路のツアーにあつたらしい。

7. 木曾

木曾の想出は酒の想出である。上松の旅館でくつろいだ時のビールのうまさは格別だつた。大体がNCTCのメンバーは下戸が多い。だから一本つつのビールももて余し気味だつた。それを私はもて余さなかつたわけである。昨夜が夜行列車で眠れなかつた。

つたのと、塩尻、鳥居の二つの峠をこえ、その夜ナイトランとなつたのだから、飯もそこそこ眠くなつてしまつた。その後私は全然覚えていない。木曾をたずねたのは昭和三〇年であるが、当時はまだサイクル・ツーリングが珍らしがられていたので歓迎もまた手がこんでいて、上松の有志が正調木曾節をきかせ、木曾駒をみせるといふ段取になつていた。私の頭の上で、正調木曾節が唄われ、スポツトライトを浴びて木曾駒をやつていたのだが、私には、木曾の木の名も聞えなかつたのだから仕末が悪い。すつかり踊りも終り有志の人たちが帰つた後で、女中が寝床を敷こうとして私を

曾 起したが、そのとき「うるせえ！」

木 とどなつたという次第である。自分の声で眼が覚めたがおかげで木曾の話が出れば、五年たつても正調木曾節を聞かない唯一人の男として話題にのぼる。翌日、浦島太郎の伝説のある寝覚の床にいたら、山田鉦雄氏から「山本君、酔覚の床だぜ」といわれた。爾後、私は酒のみの序列に入れられたことである。

そんな失敗を演じたが、木曾はいまだに忘れられない。どこがどうという細かい



いことは忘れ果てた。しかし葦原の町に最も多くみられた板ぶきの屋根も印象的で

て縄に通した味噌が台所にたくさん吊り下げられていたが、それをたいてくれたわけ

ものである。いまだに大事にしまつてあるが、そんな土産を買う気にならせるのも木曾である。

が、今日に比べてどれほど苦しかったか知れない。更にダブルチェーンホイールの普及である。ワイドレイシオのダブルチェーンホ

てクイックレリーズハブという、豪勢な仕立である。あまり威張れないのは、後で無理につけた鉄製の、マスコットのついたマ

とある。私はこれほど木曾をよく説明した言葉はないと思つた。だから、藤村の画いた木曾のあれこれも、みてまわりたいと今でも思つているが、それほどの悔を残すような急ぎ旅でもあつた。福島の間所跡も聞いてもみながつたし、賤の掛橋も高くからみただけだし、妻籠の本陣も、馬籠の部落にもいかなかつた。それでも、木曾はすべて山の中であるという実感を味わうことは出来た。そんな急ぎ旅ではあつたが、定勝寺という寺だけは、実にゆつくり遊んだ。重要文化財に指定された建物であるが、庭を美しくはききよめ、手入のよくゆきとどいた寺で、貧しげな木曾には似つかわしくないと思えるほど立派であつた。寺の格式の高さを語るものに駕籠があつた。昔、住職が使つたというその駕籠は、本堂の脇の廊下に吊つてあつたが、大名が使うそれと似て立派なものであつた。

いことは忘れ果てた。しかし葦原の町に最も多くみられた板ぶきの屋根も印象的であつた。栗の板をのせて、石でおさえてあるだけの簡単なものだが、坪二千円かかるとかで、最近ではトタンに替りつつあるとか。

島崎藤村の「夜明前」の冒頭に

「木曾はすべての山の中である」

とある。私はこれほど木曾をよく説明した言葉はないと思つた。だから、藤村の画いた木曾のあれこれも、みてまわりたいと今でも思つているが、それほどの悔を残すような急ぎ旅でもあつた。福島の間所跡も聞いてもみながつたし、賤の掛橋も高くからみただけだし、妻籠の本陣も、馬籠の部落にもいかなかつた。それでも、木曾はすべて山の中であるという実感を味わうことは出来た。そんな急ぎ旅ではあつたが、定勝寺という寺だけは、実にゆつくり遊んだ。重要文化財に指定された建物であるが、庭を美しくはききよめ、手入のよくゆきとどいた寺で、貧しげな木曾には似つかわしくないと思えるほど立派であつた。寺の格式の高さを語るものに駕籠があつた。昔、住職が使つたというその駕籠は、本堂の脇の廊下に吊つてあつたが、大名が使うそれと似て立派なものであつた。

私たちが定勝寺に長居をしたのは、昼飯を頼んだからである。味噌汁とワラビだけの簡単な食事であつたが、みんな驚くほど食べた。二十日味噌といつて、玉ころにし

て繩に通した味噌が台所にたくさん吊り下げられていたが、それをたいてくれたわけである。木曾の味として、いまだに忘れられないものである。

定勝寺は木曾義仲の菩提寺であるという。ところが木曾には、もう一つ義仲の菩提寺があり、両方が菩提寺争いをしていて聞かされた。考えてみれば木曾で有名になつた人は開びやく以来、木曾義仲と島崎藤村だけだといわれるくらいであるから、義仲の菩提寺を争うのも故なきにあらずといえるだろう。

徳音寺を訪ねたのは、前の日の夕暮であつた。武家造りの柵をめぐらした寺だが、巴御前の墓もあり、木曾の生んだ武将の菩提寺にふさわしい雰囲気ももつていた。私たちが一巡して表に出たとき、一人の年老いた寺男が帰つて来た。背負子に麻袋をつけて心持ち腰をかかめていた。私たちは寺男の話をききはじめた。いま彼が何を語つたかを思い出すことは困難である。けれども、ようやく暮色につつまれた徳音寺の前で、義仲の昔から伝えられた、いろいろな話をゆつくり話す寺男の姿は、一幅の絵のように美しかった。木曾で会つた人の中で、もつとも忘れ得ぬ人は、あの寺男だと私は今でも思つている。

多分上松で買つたのだと思うが、私は珍しく土産を買つて家へ郵送した。ネスコのウチワという。ネスコは木曾の五木のうちの一つであるが、全然紙を使わない風雅な

ものである。いまだに大事にしまつてあるが、そんな土産を買う気にならせるのも木曾である。

ものである。いまだに大事にしまつてあるが、そんな土産を買う気にならせるのも木曾である。

あとがき

東京から名古屋までの道の五カ年を回想してみると、五年間という歳月が、決して私の個人の回想にとどまるものでないことに気がつく。サイクリング界の五カ年がふつととして想い出されるからである。

五年前、岡谷の駅を降りて木曾路にハンドルを向けた頃は、「競輪か?」「競走か?」等の言葉をしきりに耳にした。それが今年の塩名田のハヤ料理屋のおかみが、「サイクリングでお出ですね」というようになつたし、和田の部落のよ

うな辺鄙な所でも、ちやんとサイクリングであることを理解していた。もはや、世の人々はサイクリングという外来語に抵抗を感じなくなつていりし、サイクリング用車という特別の車を奇異の眼でみたとしても、これがサイクリング用車であることを容易に理解するようになった。旅は、地方にどれほどサイクリングが理解されているかを知るにもよい機会であつた。

また五年の歳月は自転車をも前進させた。五年前のW/Oタイヤはソーヨーが一時時とダンロンが一時時が手に入った程度だつた。それが、今日では選択の自由が生れてきている。キャリパーブレーキも当時はフツドレバーがなかつた。だからマース型ドロップダウンヒルをやること



酒のみの序列に入れられたことである。そんな失敗を演じたが、木曾はいまだに忘れられない。どこがどうという細かい。

が、今日に比べてどれほど苦しかったか知れない。更にダブルチェンホイールの普及である。ワイドレイシオのダブルチェンホイールの市販は、サイクリストを高い所、高い所へと登らせた。私たちは楽に峠を越えることができるようになった。まだまだ、自転車に不満が多いにしても、ふりかえつてみると、感慨無量なものがある。

最後に、私が東京から名古屋まで五年もかかつたということについて若干の説明をしておきたい。それは、一つには私には長い休暇をとることができないからである。だが、より重要なことは、私は旅には時間をかけたということである。すなわち、ゆつくりと走ることである。およそ旅に出て自分の眼で物を見ないことほど、おろかしいことはない。指導標にひきずられ、案内書を読むだけで名所を理解するならば、いつた方が得策だ。自転車であれば、掴めぬものを私自身の眼で見たいというのが私の念願である。だがふり返つてみると、私の五年間の旅は私の念願どおりに行つているとはいえない。帰つてきて悔まれること必ずしも少くない。旅とはそんなものでもあろう。

私は今後また、同じように旅を続けるであろう。いつの日にか東京と米沢が結ばれ、仙台から盛岡がながるかも知れない。私はそうした旅の中に、人生の糧をみつ